

景気動向指数の解説

景気動向指数は、生産、雇用など様々な経済活動での重要かつ景気に敏感な指標の動きを統合することによって、景気の現状把握および将来予測に資するために作成された総合的な景気指標であり、CIとDIがあります。

指数には、景気に対して先行して動く先行指数、ほぼ一致して動く一致指数、遅れて動く遅行指数の3本の指数があります。先行指数は一般的に、一致指数に数ヶ月先行した動きを示すことから景気の動きを予測するときに用いられ、遅行指数は一致指数に半年から1年遅れの動きを示すことから景気の転換点や局面の確認に利用されます。

CIとDIは共通の指標を採用しており、現在は、先行指数6、一致指数9、遅行指数5の20系列です。

なお、景気動向指数は、各経済部門から選ばれた指標の動きを統合して、単一の指標によって景気を把握しようというものであり、すべての経済指標を総合的に勘案して景気を捉えようとするものではないことに留意する必要があります。

1. CI(Composite Index)の概要と利用の仕方

<目的>

CIは景気に敏感な指標の量的な動きを合成した指標であり、主として景気変動の大きさやテンポ(量感)を測定することを目的としています。

<作成方法>

個別指標の前月からの変化率(前月差もしくは前月比)を、外れ値の調整を行ったうえで合成し、前月の値に掛け合わせることで算出しています(令和2年=100)。

詳しくは、内閣府のホームページ(<https://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/di/di3.html>)「統計の作成方法」を参照してください。

ただし、閾値の算出、外れ値の刈り込みに当たって用いるデータ期間は、福井県では現在、平成12年1月から令和5年12月(直近の12月まで)としており、閾値は2.13に設定しています。

<利用の仕方>

一般的に、一致指数が上昇しているときに景気の拡張局面、低下しているときに後退局面であり、一致CIの動きと景気の転換点は概ね一致します。一致指数の変化の大きさが景気の拡張または後退のテンポを表しており、その時々景気の量感を把握することができます。

ただし、単月のCIの動きには不規則な動きも含まれていることから、基調をみる上では、足下の基調の変化をつかみやすい3か月後方移動平均や、足下の基調の変化が定着しつつあることを確認する7か月後方移動平均などの移動平均値をとることにより、月々の動きをならして試みるのが望ましいと言えます。

また、一致CIが続けて上昇(または下降)していても、その期間が極めて短い場合は、拡張(または後退)とみなすことは適当でなく、基調が拡張から後退もしくはその逆方向に変化したと判断するためには、一致CIがある程度の大きさで変化し、またその拡張(または後退)がある程度の期間、持続していることが求められます。

2. DI(Diffusion Index)の概要と利用の仕方

<目的>

DIは、景気に敏感な諸指標を選定し、そのうち上昇を示している指標の割合を示すものであり、景気拡張の動きの各経済部門への波及度合いの測定や、景気局面の把握を主な目的としています。

<作成方法>

採用系列の各月の値を3ヶ月前の値と比較して、増加したときには+を、保合い(もちあい)の時には0を、減少したときには-をつけます。逆サイクル(※)の系列については、符号が逆になります。

その上で、先行・一致・遅行の各系列群ごとに採用系列数に占める拡張系列数(+の数)の割合(%)を求めます。

DI = 拡張系列数 / 採用系列数 × 100(%) (保合いの場合は0.5としてカウントする。)

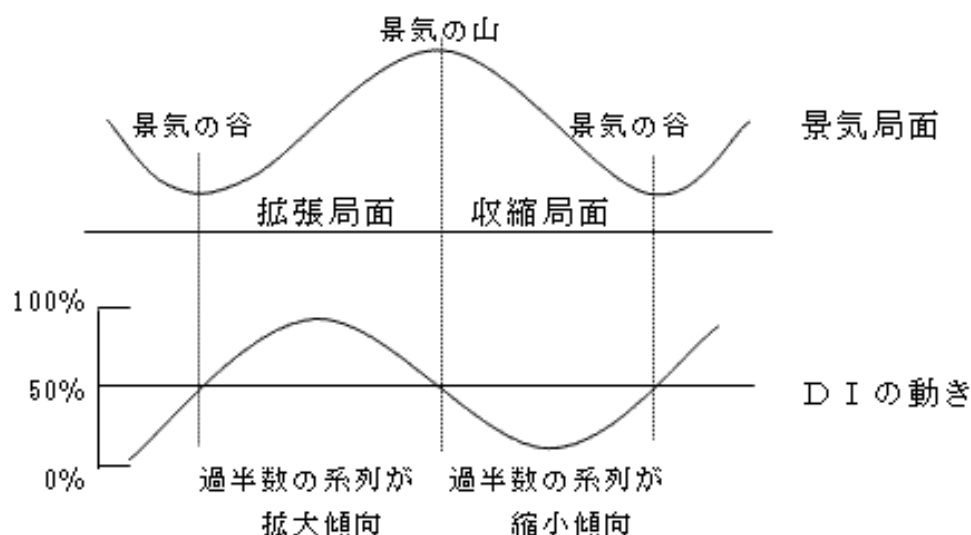
※逆サイクル:例えば、企業倒産件数についてみると、倒産件数が増加すればマイナス要因になり、逆に減少するとプラス要因となる。

<利用の仕方>

一致指数が基調として(概ね3ヶ月程度の動き)50%を上回っているときが景気拡張局面、50%を下回っているときが景気後退局面にあたり、50%を上から下に切る時点の近傍に景気の山、下から上に切る時点の近傍に景気の谷があると考えられています。

DIは、景気の拡張がより多くの分野に浸透していったことを示す指標であり、景気拡張が加速していることを示すものではないことに注意が必要です。

景気循環の局面



※CIとDIの違い

以上のように、DIが景気各経済部門への波及度合いを表し、景気局面判断に用いる指標であるのに対し、CIは景気の強弱を定量的に計測する指標であり、DIでは計測できない景気の山の高さや谷の深さ、拡張や後退の勢いといった景気の「量感」を計測することができます。

このため、DIは主に、景気局面や景気転換点の質的な分析に、CIは主として、景気変動の大きさやテンポを比較するといった量的な分析に活用するものとして位置付け、両者を相互補完的に利用します。

3. 累積DIの概要

<概要および作成方法>

基準年月(本県では昭和54年12月)を0として、各月のDIの値を次の式により累積したものであり、一致指数の山・谷が、景気の山・谷とほぼ一致している。

$$\text{累積DI} = \text{先月の累積DI} + (\text{今月のDI} - 50)$$

4. 景気基準日付

景気循環の局面判断や各循環における経済活動の比較等の材料として、主要経済指標の中心的な転換点である景気基準日付(山・谷)を設定しています。

この日付の設定にあたっては、景気動向指数の一致系列の動きを参考にしつつ、他の主要経済指標の動きや専門家の意見を勘案し決定しています。

| 景気循環 | 全 国 | | | | | | 福 井 県 | | | | |
|-------|---------|---------|---------|-------|-------|---------|---------|---------|-------|-------|--|
| | 谷 | 山 | 谷 | 期 間 | | 谷 | 山 | 谷 | 期 間 | | |
| | | | | 拡 張 | 後 退 | | | | 拡 張 | 後 退 | |
| 第8循環 | S50年 3月 | S52年 1月 | S52年10月 | 2 2か月 | 9か月 | S50年 1月 | S51年11月 | S52年10月 | 2 2か月 | 1 1か月 | |
| 第9循環 | 52年10月 | 55年 2月 | 58年 2月 | 2 8か月 | 3 6か月 | 52年10月 | 55年 2月 | 57年10月 | 2 8か月 | 3 2か月 | |
| 第10循環 | 58年 2月 | 60年 6月 | 61年11月 | 2 8か月 | 1 7か月 | 57年10月 | 60年 1月 | 62年 1月 | 2 7か月 | 2 4か月 | |
| 第11循環 | 61年11月 | H3年 2月 | H5年10月 | 5 1か月 | 3 2か月 | 62年 1月 | H3年 5月 | H6年 3月 | 5 2か月 | 3 4か月 | |
| 第12循環 | H5年10月 | 9年 5月 | 11年 1月 | 4 3か月 | 2 0か月 | H6年 3月 | 9年 6月 | 10年11月 | 3 9か月 | 1 7か月 | |
| 第13循環 | 11年 1月 | 12年11月 | 14年 1月 | 2 2か月 | 1 4か月 | 10年11月 | 12年 6月 | 14年 1月 | 1 9か月 | 1 9か月 | |
| 第14循環 | 14年 1月 | 20年 2月 | 21年 3月 | 7 3か月 | 1 3か月 | 14年 1月 | 18年10月 | 21年 4月 | 5 7か月 | 3 0か月 | |
| 第15循環 | 21年 3月 | 24年 3月 | 24年11月 | 3 6か月 | 8か月 | 21年 4月 | 23年11月 | 24年 9月 | 3 1か月 | 1 0か月 | |
| 第16循環 | 24年11月 | 30年10月 | R2年5月 | 7 1か月 | 1 9か月 | 24年 9月 | 30年 5月 | R2年5月 | 6 8か月 | 2 4か月 | |

() は暫定、—は未決定